

着色散水

1 虎が

虎が 死んでゐるのね
と 小さい女の子の声がした
俺はその女の子の来る方へ歩いて行つた
谷川のほとりでは羊歯がゆれてゐた
女の子のうしろから その母親も歩いて来た
あれは 虎ではないのよ
俺が谷川に来て感じたことは 木洩れ日がたくさん光つてゐること
思つてゐたのとは逆の方向に
この谷川が流れてゐたといふことだ
さうだつたかなあ 俺はさうつぶやいて
仕方なく 流れにさからつて歩いてゐるのだ
俺は谷川を下るつもりだつたのに かういふことはあるものだ
若い母親のセーターの肩にも 射撃のやうに日は当る
あれは 猫なのよ うそよ 虎よ 猫 猫ちゃんよ ちがふわ
俺の前の崖の中途にひつかかつて
首筋の毛を立てて うつむいた小さなものの死骸がある
水は白くそのまはりを避けて通つてゐる

2 このあひだ君と

このあひだ君と雑談してゐた時 談たまたま滝におよんだ
春に水量を多く虹を描き出すといふこととか
寒い時にはつららが下がり 濡れた岩壁がそびえ 途中の岩から
枯蔓が風に吹かれてゆれてゐることがあるといふ話などした
君がああを覚えてみてくれたことがわかつた
そして いいな とも言つてくれた
現実に 僕は 今 目の前に滝を見てゐる
ある場所が高い所で岩と木のあひだで低くなつてゐる
狭いふくれあがる流れに光が当つて
その上にさし交してゐる枝
遠くからは枝は動かない黒い骨に見える
水は乱れながら休むことなく 粉になつて落下してゐる
途中の岩にぶつかかつて 形を崩しながら
自分の主張があるのであらう 音をしづめて

形をすぐにととのへようとしてゐる
落ちつくした水は もう一度
横の方に 跳ねあがる
考へてみた時とは別の力があることがわかつた
そして 不思議なものだ 僕には
「滝見てその夜宿に眠れぬ」といふのが
今日のこの予感であつたやうに思へるのだ

3 限りなく

限りなく 登りの道である
僕の乗つてゐるバスはそこを突つこんで行く
僕の乗つてゐる場所からは山の方も見える
車内もうすぐらくなつて
黒い山の上の木が黒い細い姿に移り変わる
移り変つた いや まだ 雲は 震動の度毎に
赤い色を見せるではないか
去るのか 僕は去りつつあるのか いや まだ
僕は去りはしない 去ることも出来ない
あれは生存してゐて 僕は悲しんでゐる
いつの日か 夜の中に自分をまぎらせようとしてゐる
やさしくはなかつたのか
曲る所で 前の道が急に明るくなり
自動車が一台 やつて来た
それは注意深くもどつて行つた
バスはそれを追ふやうに行く 追ふやうに
ねつとりとした関係である
登りつめたのであらうか
今度は全くの夜の中に
遠く向ふに連なつてゐる無数の電燈